

(仮訳)

科学的助言ラウンドテーブル 2024

「研究セキュリティ確保のための科学技術顧問・科学的助言の役割」

2024 年 10 月 5 日 (土) 16:30-17:50 京都国際会館

主催：国立研究開発法人科学技術振興機構

議論サマリー



出席者 (アルファベット順)：

カーチャ・ベッカー

アンドレアス・ゴセンバーグ

橋本和仁

サビーネ・ヘンツラー

小安重夫

松本洋一郎

大野英男

デイブ・スミス

ドイツ研究振興協会 (DFG) 会長

スウェーデン研究・高等教育国際協力財団 常務理事

内閣官房科学技術顧問/科学技術振興機構 (JST) 理事長

EU 共同研究センター (JRC) 戦略・インパクト担当ディレクター

文部科学大臣科学技術顧問/量子科学技術研究開発機構理事長

外務大臣科学技術顧問

経済産業省特別顧問 (科学技術担当) /東北大学総長特別顧問

英国政府国家技術顧問

進行・事務局：

有本建男

浅野佳那

科学技術振興機構 (JST) 参与 (進行)

同 研究開発戦略センターフェロー

次田彰

佐伯浩治

新井知彦

小林治

同 理事

同 研究開発戦略センター副センター長

同 経営企画部長

同 国際部長

議論サマリー：

AI、量子、バイオ、マテリアル等の新興科学技術が社会に多大な影響を及ぼし、地政学的な情勢の不安定化が進む現代において、参加者は、研究の開放性や自由は遵守されるべきであり、こうした研究が本来有する本質と保護のバランスを取りつつ、研究セキュリティ・インテグリティの確保を進めることが重要であることで一致した。その上で、各国・地域のベストプラクティスや直近の取り組みを共有し、科学技術機関が果たすべき役割や機関として抱える共通課題について率直な議論を行った。具体的には、以下のことを確認した。

- 人類が気候変動、パンデミックや経済格差等の地球規模の問題に立ち向かうためには、科学技術イノベーション（STI）が不可欠である。STIの創出には、研究者の国境を越えた自由な交流や自由な発想に基づくアイデアが重要な役割を担っていることは紛れもない事実である。したがって、研究の自由を担保し、国際連携が積極的に推進されるような、オープンな研究環境を作ることが不可欠である。
- 一方、新興科学技術は、国家の経済力のみならず、今や安全保障や外交といった重要アジェンダに対しても大きな影響力を有している。経済的利害関係の対立や地政学的緊張の高まりなど、一時代前のグローバリズムでは語れない複雑な時代に突入している現代において、そのような科学技術が適切に取り扱われるように保護することも喫緊の課題である。
- 国際関係の文脈では、今日、研究の自由と保護という相対する概念の間でバランスを取ることが、各国・地域が共通して抱える非常に困難かつ重要な課題となっている。研究は可能な限りオープンとし、保護・制限する部分は最小限とするアプローチ（as open as possible, as closed as necessary）が現在の共通認識である。研究セキュリティとは、決して科学の自由や開放性を制限することではなく、こうした研究の本質を保護し維持するための手段である。
- また、すべての研究セキュリティ上のリスクを絶対的にコントロールすることは不可能であることを認識しなければならない。その上で、国際協力に伴う「リスクと利益（Risk and Benefit）」を、責任を持って評価し、最大の成果を得られるような戦略的な de-risking が重要である。また、リスクは個別の研究によって異なる事を踏まえ、統一的・一般的ルールを当てはめるのではなく、個別のリスクに対処する risk-based approach で対応することが効果的である。
- こうした取組を進めるためには、研究者や研究機関の研究セキュリティ・インテグリティに関する意識を向上（Raise Awareness）が重要である。また、政府はルールやガイドラインを提示するのみならず、研究者・研究機関の責任ある判断を支援するための仕組みを構築することも効果的であり、米国の Secure Centerⁱ、英国の RACTⁱⁱ、ドイツの KEFⁱⁱⁱが好事例であろう。

- 多くの関係者（ステークホルダー）が絡むこの問題に解を与えるためには、政・産・官・学の垣根を超えて対話を続けていく必要がある。政府が、アカデミアをはじめとしたステークホルダーとの議論を踏まえ、理解と信頼を醸成した上で、明確な方針を打ち出し広く伝えることが重要である。各研究者は、政府の考え方を理解する努力を続けながら、所属研究機関の支援のもと、自身の倫理観に沿って研究インテグリティ・セキュリティに配慮しつつ、自由で開かれた責任ある研究を進めるべきである。

最後に、各国で状況が異なるため、個々の事例や経験を共有し、方針や取組を尊重しつつ、責任ある国際連携推進にあたっては、取組をハーモナイズさせる必要があることを確認した。また、こうした取組には科学技術顧問/科学的助言の役割が重要であることを認識し、今後このような対話を積極的に継続していくことで一致した。

留意事項：チャタムハウスルールで議論を実施。

ⁱ <https://new.nsf.gov/news/nsf-backed-secure-center-will-support-research>

ⁱⁱ <https://www.gov.uk/government/organisations/research-collaboration-advice-team>

ⁱⁱⁱ <https://www.sicherheitsrelevante-forschung.org/>